

【研究報告】

マオリ神話の昔話性について

橘 日出来（日本 NZ 学会）

1. はじめに

マオリ神話とは、ニュージーランドの先住民マオリ族にかかわる神話である。もともとマオリ族は東ポリネシア（現在のタヒチ周辺）に居住していたポリネシア人の一部族であって、西暦 800 年以降にニュージーランドへ移住し、定住した人々であると伝えられている（Sinclair 1982、J.Davidson 1984、K.R.Howe 2003、他）。

このマオリ人には、その資質にふさわしい一つの神話体系があり、とりわけ天地創造の神話は、その美しさにおいて旧約聖書の「創世記」に匹敵するとされている（Alpers 1982）。また彼らには部族間の戦争を記録した事実と伝説との相半ばする壮烈な部族史譚やはるばる南太平洋を漕ぎ渡った英雄叙事詩的な物語の宝庫がある（前掲書）。

これらの神話・伝説は主としてニュージーランド総督ジョージ・グレイ卿により収集され、これが 1855 年に『ポリネシアの神話』としてロンドンで最初に刊行された。

その後、100 年以上経過した 1982 年に、アントニー・アルパーズによるマオリの神話および伝説が集大成された「マオリ神話」が刊行された。

その内容は「混沌、洪水、女性の創造」などの神話の普遍的要素および「マオリのカヌー伝説」からなっている（Alpers 1982）。これらのマオリ族の神話・伝説は、それ自体が文芸的に興味深いものであるが、同時に、そこに現れる世界観、自然観、宗教観・倫理観、社会組織、経済生活、行動範囲、技術体系などは大いに考究に値するものである（由比浜、1996）。

いずれにせよ、このマオリ神話や伝説がマオリ族の歴史を物語るばかりでなく、彼らの文化的背景を形成し、精神的支えとなっていることは確かである。

2. 本稿の主旨

本稿はマオリ神話のうち「マウイ火をもてあそぶ」という話を昔話に見立てて、ロシアのフォルマリズム民俗学者ウラジーミル・プロップの「昔話の形態学（翻訳版 1991）」の登場人物の機能と対照し、プロップ理論をマオリ神話に適用し、マオリ神話の昔話性について考察するものである。

3. プロップの登場人物の機能

プロップはその著「昔話の形態学」の中で、昔話の登場人物の機能について次のように言及している。

1) 昔話の恒常的な不変の要素となっているのは、登場人物たちの機能である。その際、こ

これらの機能がどの人物によって、またどのような仕方で実現されるかは関与性を持たない。これらの機能が昔話の根本的な構成部分である。

2) 魔法昔話に認められる機能の数は、限られている。このような前提で、彼は昔話の登場人物について 31 個の機能に分類した。もちろん、あらゆる昔話が 31 個の機能をすべて備えているということはまったくない。

4. これらの機能を列挙すると、次のとおりである。

- | | | | | |
|-----------------|--------------|--------------|---------|--------|
| 1) 留守 | 2) 禁止 | 3) 違反 | 4) 探り出し | |
| 5) 情報漏洩 | 6) 謀略 | 7) 幫助 | 8) 加害 | |
| 8) - a 欠如 | 9) 仲介 | 10) 対抗開始 | 11) 出立 | |
| 12) 贈与者の第一機能 | 13) 主人公の反応 | 14) 呪具の贈与・獲得 | | |
| 15) 二つの国の間の空間移動 | 16) 闘い | 17) 標づけ | 18) 勝利 | |
| 19) 不幸・欠如の解消 | 20) 帰還 | 21) 追跡 | | |
| 22) 救助 | 23) 気付かれざる到着 | 24) 不当な要求 | 25) 難題 | 26) 解決 |
| 27) 発見・認知 | 28) 正体露見 | 29) 変身 | | |
| 30) 処罰 | 31) 結婚 | | | |

・機能の継起順序は常に同一である。

・あらゆる魔法昔話が、その構造の点では単一の類型に属する。ただし、これらの機能のすべてが個々の話に出てくるわけではない。そのうち不可欠の機能は「加害または欠如」である。

5. 「マウイ火をもてあそぶ」へのプロップの機能の適用

- 1) マウイは村中の火を消してしまう（違反）
- 2) 火がなくなる（欠如）
- 3) 老曾長たちは、召使たちにマファイカ（火の所有者）の所へ行って、火を取ってくるように命じたが拒否された（難題）。それで、マウイがこの難題を引き受ける。
- 4) 母親がマウイにマファイカの所へ行く道を教える（幫助）
- 5) マウイ火を取りに行く（出立）
- 6) 母親はマウイに、魔法を仕掛けてはいけないと言う（禁止）
- 7) マウイは女神マファイカの所に到着する（二つの国の間の空間移動）
- 8) マウイは女神マファイカに火のありかを尋ねる（探り出し）
- 9) マファイカはマウイに尋問する（贈与者の第一機能）
- 10) マファイカはマウイに火のありかを教える（発見・認知）

- 11) マファイカは自分の指を抜いて火をマウイに与える (呪具の贈与・獲得)
- 12) マウイは次々にマファイカの指を抜かせる (謀略・不当な要求)
- 13) マファイカは火をマウイに渡さないで、地面に投げ付けると、あたり一面が火の海となる (加害)
- 14) マウイは鷹に変身して炎の上に舞い上がる (変身)
- 15) 炎はマウイを執拗に追いかけてきた (追跡)
- 16) マウイの祖神タフィリは雨を降らせて、火を消した (救助)
- 17) 火種はマホエ、トタラ、カイコマコなどの木々に貯えられ、爾後その木を摩擦することにより、火を得ることができた (不幸・欠如の解消)
- 18) マウイは村に戻ってきた (帰還)
- 19) 両親はマウイがマファイカをからかっただけではいけないという忠告を無視したことを叱った (違反、処罰)
- 20) マウイは両親に逆らった (対抗開始)
- 21) マウイはいかなる火も村に持ち帰らなかった (欠如)
- 22) マウイは新たな冒険に加わってくれる仲間を探しにでかけた (出立・留守)

6. マオリ神話の昔話性の考察

1) プロットの理論がかなり適用できる

・この小編の話の中に、プロットの31の登場人物の機能のうち大部分の機能が表出されている

・不可欠の機能である「加害」、「欠如」も出ている。ただし、機能の継起順序はプロットのものとは異なる。

以上の考察からマオリ神話は昔話としての要件を満たしていると考えられる。

2) 神話と昔話との関係。

・レビー・ストロース：神話と昔話の一つのものの両面である。神話是对立（生と死、天と地、光と闇）が民話より強い。

・プロット：神話と昔話はその形式においてではなく、その機能において異なるのである。神話から昔話が展開した。

・伊藤清司：昔話は神話や古い信仰から発生した。

・柳田国男：昔話は神話のひこばえである。

・福田晃：民間説話に民間神話を加えて論及すべきこととなる。

・マオリ神話は「天地創造」を除いては、移住伝説や英雄伝説が多い。いわゆる民話の部分が多い。

・マウイは半神半人である。

・〈何かを手に入れたいという願望〉が一貫したモチーフである。

プロップによると、例えば、王が息子に火の鳥をとりに行かせる。主人公が呪術的手段を与えられて、家を出る。主人公が贈与者または求める物を見つけだすのを手伝ってもらえる。援助者との出会い、敵との決闘、帰還、追跡。その間における試練—結婚という図式である。「マウイ火をもてあそぶ」の場合、結婚ということを除いては、まさしくプロップの言う図式があてはまる。この点に関して、マウイの物語は魔法昔話であると言えることができるであろう。

- ・マオリ神話（マウイにかかわる部分）は、昔話の必要・十分条件を満たしている（「むかしむかし」で始まることなど）の要件を満たしている。「桃太郎」、「浦島太郎」が昔話であるように。

- ・マオリ神話は時代、場所が明示されていないし、信ずることも要求されていないので、伝説とは言い難い。やはり、「一寸法師」のように昔話とされても良いのであろう。

6. まとめ

マオリ神話は完全な意味での神話ではない。マウイは半人半神であるし、活動場所も天界でもない。敢えて言えば、文化起源神話と言えないことはない。

また、神話とは民衆がその現実性を信じている神、あるいは神的存在にかかわる話である（プロップ、1983）。そうであれば、マウイに関して神という表現は見当たらない。いわゆる、トリックスターとしてのマウイの認識が一般的である。したがって、マウイにかかわる話は神話とは言い難い。

神話と昔話の区別に関して、プロップは次のように言及している。形式上で神話と昔話を区別することはできない。昔話と神話は時として、完全に一致するため、民俗学や口承文芸学においては、このような神話を昔話と呼ぶことがしばしばある。

まさしく、マオリ神話（マウイにかかわる部分）はこのことに該当する故に、昔話とも呼ぶことができると考える。

7. おわりに

本稿ではマオリ神話のうち「マウイ火をもてあそぶ」だけを取り上げたのであるが、「マウイ太陽の動きを遅らせる」等、他の話についてもプロップの「昔話の形態学」の登場人物の機能と対照し、マオリ神話の昔話性について更なる検証を試みることを今後の課題としたい。

参考：

神話・民話・伝説・昔話に関する諸説

同じような題材が語られる場合でも、神話、民話、伝説、おとぎ話、昔話、童話などの用語が使われている。例えば、「浦島太郎」や「桃太郎」の話にしても、神話とは言わないまでも、「浦島伝説の研究」(阪口保、新元社(1955))、「英雄伝説桃太郎新論」高木俊夫、平凡社(1974)のように伝説として取り扱われる場合がある。もちろん「浦島太郎」や「桃太郎」がおとぎ話であり、昔話であり、童話であることには異論はないであろう。

ここで、これら用語の定義について簡単に言及することとする。

- ・小沢俊夫(1998)：神話と民話について、神話は神様の行状を語るものであり、民話は人間達の行状を語るもの。
- ・関敬吾：「日本昔話集成」(角川書店、1950～1958)："folktale"を民話と訳した。もちろん、この中には伝説や昔話が含まれている。
- ・小沢俊夫(1998)：柳田国男は民話ではなく、「口承文芸」という学術用語を使用している。これに含まれるものとして諺、なぞなぞ、民謡、伝説、昔話、世間話、笑い話などがある。
- ・宮田登(1993)：「神話は古代社会に属するのに対して、伝説は後世の人々が前代からの語り伝えや信仰・祭儀について解釈した内容」としている。：神話の概念はそれほど明確でなく広く伝説や昔話を包括することができる。
- ・伊東清司(1993)：神話と伝説とはその語られている対象が遙久の原古か、それ以外かで区分される。
- ・小沢俊夫(1998)：伝説と昔話の差異について、「伝説は時代・場所・人物が特定のものであるのに、昔話は時代・場所・人物が不特定である。また、伝説の場合には語られている事柄が信じられることを求めているのに対して、昔話は内容を信ずることを求めている。
- ・大林太良(1966)：ストックホルム大学のフルトクランツ教授は「説話を神話・伝説・昔話に分けている」。
- ・福田晃(1989)：民間説話は伝説・昔話・世間話を総括する・・・それに民間神話を加え、語り物をも便宜的に含めて論及すべきこととなる。
- ・本田義宏(1991)：説話は文学ジャンル(今昔物語集、宇治拾遺物語等)であり。教説、説法である。

主要参考文献

- アールネ＝トムソン 1951. 『昔話の型』.
- 荒木博之編 1994. 『フォークロアの理論』, 法政大学出版会.
- アントニー・アルパーズ 1982. 『マオリ神話』, サイマル出版会.
- 伊藤清司 1991. 『昔話・伝説の系譜』, 第一書房.
- 大林太良 1966. 『神話学入門』, 中公新書.
- 小沢俊夫 1998. 『昔話入門』, ぎょうせい.
- キース・シンクレア 1984. 『ニュージーランド史』, 評論社.
- 関 敬吾 1950～58. 『日本昔話集成』, 角川書店.
- ダンダス、池上嘉彦訳 1980. 『民話の構造』, 大修館書店.
- 日本記号学会編 1985. 『語りー文化のナラトロジー』, 記号学研究6, 東海大学出版会.
- 大塚民俗学会編 1994. 『日本民俗事典』, 広文社.
- ウラジミール・プロップ 斉藤君子訳 1983. 『魔法昔話の起源』, せりか書房.
- ―――、北岡誠司、他訳 1991. 『昔話の形態学』, 水声社.
- 福田晃 1989. 『民間説話』, 世界思想社.
- 本田義宏 1991. 『説話とは何か』, 勉誠社.
- マックス・リュテイ 1969. 『ヨーロッパの昔話ーその形式と本質』, 岩崎美術社.
- 柳田国男 1947. 『口承文芸史考』, 定本6巻、筑摩書房.
- ――― 1931. 「世間話の研究」、定本7巻、筑摩書房.
- 柳田国男監修 1948. 『日本昔話名彙』, 日本放送出版協会.
- 由比浜省吾訳 1996. 『マオリ神話と伝説』, 由比浜省吾 (私本).